

HEALTHY



ケリー教授の日課はスポーツ紙を読む
ことから始まる＝阪神甲子園球場で

ノモが米国で大活躍し、イチローやマツイが注目されているいまのプロ野球は、昔とは違わず――。阪神、オリックス、近鉄の関西三球団を「文化として」観察するため、米国人文化人類学者がやってきた。エール大学のウイリアム・ケリー教授(左)。山形県留学中に身につけた「ズーズー弁」を武器に精力的取材を進めている。

(石川 雅彦)

関西三球団で「ノモ」研究

米のケリー教授

「菊とバット」はもう古い？

ミ関係者たち。今後は選手の家族にも話を聞いていく予定だ。京大の研究員として山形県の農村に二年間滞在したことがあり、日本語は堪能だ。研究の目的は「菊とバット」で米国に広がった日本野

球のイメージの見直し。一九七七年に出たロバート・ホワイティング氏の『菊とバット』は別名「来日外国人選手のバイブル」。日本のプロ野球を「努力」「和」「猛烈な練習」「集団主義」などのキ

にしたものばかりで、取材対象が来日外国人選手に偏っています。そんな思いが「関西三球団」を選ばせた。同教授によれば、いまの球団はよくとえられる日本の「武士社会」や「軍隊」より日本の「中小企業」に似ている。選手への福祉制度は充実しておらず、組合は活発ではない。成績の悪い選手はすぐ首を切られ、球団を移る自由も制約されている。

「武士社会」というより「中小企業」

野球は常に日本社会とともに歩んできた。教育制度、企業文化、メディア、郷土愛、それに国民世論などあらゆる影響を受けている。日本文化を研究するうえで貴重な対象です」と話している。

選手とは対照的に、コーチ陣は自由に移籍するのも不思議だ。監督が代わると、親しいコーチを呼び「〇〇一家」という集団を作る……。

ケリー教授は「日本のプロ野球は常に日本社会とともに歩んできた。教育制度、企業文化、メディア、郷土愛、それに国民世論などあらゆる影響を受けている。日本文化を研究するうえで貴重な対象です」と話している。

選手をマスメディアが養う「評論家」という職業も特だ。評論家は生活が保証され、メディアは、彼がまたユニホームを着るときに備えて先行投資する。スポーツ新聞と選手の仲のよさも米国にはない。